

アメリカ学会会報

— The American Studies Newsletter —

No.212

July 2023

『ジュリアン・バトラーの真実の生涯』と ゴア・ヴィダル

本 合 陽

川本直氏の『ジュリアン・バトラーの真実の生涯』が第73回読売文学賞を受賞した。2022年2月のことである。選考委員でもある若島正氏は、「エーコの『薔薇の名前』に比肩するこの野心作が翻訳されて世界中で読まれたら、どんな反響を呼ぶだろうか。」と作品を絶賛している。

本書は複雑な構成を持つ作品だ。数々の問題作を世に問うたトランスベスタイトの作家、ジュリアン・バトラーの人生を、恋人であり、いわばゴースト・ライターであるジョン・ジョージ氏がアンソニー・アンダーソンの名前で世に問うた伝記を川本直が翻訳し、長文の解説文と膨大な主要参考文献を付した、いわばフィクションとしての意匠を様々凝らした作品である。そういった、フィクションの可能性を追求した作品として評価されていることも事実だが、『週間読書人』2021年10月29日号で高原英理氏が、「ゲイ小説、もっと正確にはクィア小説としての、いわば主張の正当さ」を指摘するが、ジェンダーとセクシュアリティをめぐる問題こそ、この小説の真骨頂と私には思える。というのも、女装していた時期もあり、自らをバイセクシュアルと定義する川本直氏は、幼少期からゴア・ヴィダルの作品を読みあさり、ついには気難しいことで有名なヴィダルとインタビューを行い、その記事で作家デビューを果たしているのである。

ジェイ・パリーニが言うように、ヴィダルは多作であるだけでなく、様々なジャンルの作品を描いたために、文学評論家から評価されてこなかった可能性がある。戦争小説でデビューしたが、「安全に振る舞うことに飽き飽きし」、同性愛のアンダーグラウンドの世界を背景に、男性に恋する普通の男性を描く『都市と柱』を1948年に世に問うた結果、文学評論家から無視されるに至る。しかし、その20年後、トランスジェンダー女性の破天荒な人生を描く『マイラ』を出版した。イタロ・カルヴィーノも絶賛した『マイラ』こそが、ヴィダル作品の真骨頂だろう。川本氏の著書は、マイラを彷彿させるジュリアン・

ン・バトラーと、学者肌である恋人ジョン・ジョージによる合作とすることで、ヴィダルの持つ多面性への一つの解釈を示したと読むこともできる。実はヴィダルを理解するための最良の書でもあるのだ。

マイロンとして生まれたが、トランスしてマイラとなる。トランスジェンダーの一つの目標がパスすることにあるのと比べると、マイラの行動は一言で形容するならば、異論もあるようだが「キャンプ」という語が相応しい。デニス・アルトマンが、「セックスとジェンダーに関する支配的な規則を転覆することを、クィア・セオリーの様々な著作よりもヴィダルは『マイラ』において多く語っている」と述べるが、ヴィダルのサティリカルな知性がキャンプの精神を併せ持つことで、当時のジェンダーやセクシュアリティの規範に対し、『マイラ』は明らかに異議申し立てを行っている。

ヴィダルはエッセイストとしても活躍した。その批評眼は鋭い。1979年に出した“Sex is Politics”ではセックスがいかに政治と結びついているかを喝破し、「ある社会の性的態度は政治的決定の結果なのだ」と書いている。その通りだろう。その意味でアメリカはどこに向かおうとしているのか。オンライン版『ブルームバーグ』が伝えるところによると、2023年はすでに、過去5年間よりも多い数の反LGBTQ法案が提出されているということだ。特にその矛先はトランスジェンダーに向かっている。

ヴィダルのような強靱な知性が今こそ必要なのではないだろうか。その意味で、メタフィクションの意匠を凝らしているとしても、根本のところ（トランス）ジェンダーと（ホモ）セクシュアリティを正面から扱う『ジュリアン・バトラーの真実の生涯』が英訳され、それを契機にアメリカでもヴィダル再評価の機運が高まって欲しいものだ。

(東京女子大学)

アメリカ学会 2022 年度事業報告

1. 会員数

学会運営の適正化と経費節減のため、内規第 I 条 3 項「年会費を 3 年間滞納すると退会処分となる」に照らして 10 名を除名した。それに伴い 2023 年 3 月 31 日現在の会員数は 1,019 名（一般会員 908 名、院生会員 90 名、海外会員 7 名、名誉会員 5 名、維持会員 11 社）となり、前年度末より 20 名弱減少した。異動内訳は以下の通り。

〔前年度末 1037 名〕*

新入会員 25 名（一般 13 名、院生 10 名、維持 1 社、海外 1 名）

退会員 41 名（除名 10 名、逝去 9 名、希望退会 23 名、2020 年度末遡り退会 1 名）

* 会員異動の確定時期が異なるため、前年度末の集計数を記載。

2. 評議員の選出

2022 年 6 月 30 日を締め切りとして理事に評議員の推薦を依頼し、その中から 54 名の評議員を選出した。

3. 常務理事および委員長の交代

2023 年 6 月開催の第 57 回年次大会後、年次大会企画委員会では、次の開催校（早稲田大学）の責任者となる麻生享志会員に代わり中垣恒太郎会員（専修大学）が常務理事になる。また、国際委員会では、委員長の交代に伴い小田悠生会員（中央大学）に代わり、関口洋平会員（フェリス女学院大学）が常務理事になる。さらに、中原伸之賞選考委員会では、2023 年度の委員長が中嶋啓雄副会長（大阪大学）から奥田暁代副会長（慶応義塾大学）に交代する。

4. 会務委員会

2022 年 12 月に PDF 版会員名簿を完成させ、2022 年 12 月 27 日より 2023 年 3 月 31 日までの期間、会員向けにウェブ公開を実施した。学会メーリングリスト未登録の会員向けには、郵送で対応した。また、2022 年 8 月に評議員の選出、2023 年 5 月に会長選挙を行った。

5. 年次大会企画委員会

(1) 2023 年度年次大会（第 57 回）の開催

2023 年年度年次大会（第 57 回）は、6 月 3～4 日に専修大学にて開催した。開催にあたっては、アメリカ研究振興会から財政的支援を受けた。

(2) 2024 年度年次大会（第 58 回）の準備

2024 年年度年次大会（第 58 回）は、早稲田大学にて、2024 年 6 月に開催予定である。

(3) 2023 年度年次大会旅費補助について

2023 年度年次大会の旅費補助金を 1 名に支給した。

6. 年報編集委員会

2022 年度は、年報『アメリカ研究』第 57 号（特集テーマは、「裁くアメリカ／裁かれるアメリカ」）を刊行した。中原伸之賞受賞作についても清水博賞受賞作にならない長文書評を掲載することが 2021 年度の常務理事会で決定されたため、第 57 号に過去の分も含めて掲載した。『アメリカ学会会報』は、例年と同様、3 つの号（209、210、211 号）を発行した。

7. 英文ジャーナル編集委員会

2022 年 6 月より、編集長山岸敬和会員、副編集長橋川健竜会員で編集委員会を運営し、年 3 回の編集会議を行なっている。現在刊行の最終段階にある第 34 号は“Division, Diversity, Unity”を特集テーマに 7 本の論文が掲載される予定である。第 35 号の特集テーマは“Voices”であり、投稿論文の査読を開始している。

8. 清水博賞選考委員会

第 28 回アメリカ学会清水博賞を 3 名に授与した。

9. 斎藤眞賞選考委員会

本賞は 2 年に 1 度の賞であるため 2022 年度は実質的な活動は行わなかった。2023 年度の授賞に向け、候補が出揃う 7 月より選考を開始する予定である。

10. 中原伸之賞選考委員会

第 4 回アメリカ学会中原伸之賞を 1 名に授与した。

11. 広報・電子化情報委員会

学会ウェブサイトの管理と更新ならびにメーリングリストの管理を行った。特に2022年度の後半には、課題であったウェブサイトのリニューアル作業への対応を中心に進めた。2023年2月から新サーバへの移設とデータ移行作業を実施し、5月末に新ウェブページを公開した。会員向けメーリングリストも新サーバに移設し、運営を始めている。今後もさらなる改善に努める。また、会員情報の管理を行う「マイページ機能」を2023年夏ごろに新たに設置する。

12. 国際委員会

(1) 2021年度行事(2021年6月7日~2022年6月5日)について

- ① 2022年・第56回JAAS年次大会(2022年6月4日~5日,中央大学)にて, American Studies Association (ASA), Organization of American Historians (OAH) との共催ワークショップ A/B “Queer Futurities: Utopias, Dystopias and Disruptive Transnationalism: Gender, Environment and Religion” を実施した。
- ② ASA との共同プロジェクトとして, プロセミナーを, 2022年6月4日, 中央大学にてハイブリッド開催した。

(2) アメリカ学会海外渡航奨励金

2022年度前期募集において, 2名にそれぞれ15万円を給付した。
2022年度後期募集において, 1名に15万円を給付した。

(3) 2022年ASA年次大会への委員派遣, 日米友好基金の大学院生補助給付

2022年ASA年次大会は, 2022年11月3日~6日, ニューオーリンズで開催された。国際委員会から, 小田悠生委員長(中央大学)と関口洋平委員(フェリス学院大学)が出張し, ASAとの会議を行った。日米友好基金による, 留学中院生向けの大会参加費用補助金を2名に支給した。

(4) 2023年・第57回JAAS年次大会ワークショップの決定

2023年・第57回JAAS年次大会(2023年6月3日~4日, 専修大学)にて, ASA-ASAK (American Studies Association of Korea) との共催ワークショップ “Transnational Contact and Human Mobility”, OAH との共催ワークショップ “Liberty and Equality in Early America” を設けることを決定した。

(5) 日米友好基金給付金による, ASAからの2023年JAAS年次大会招聘研究者

2023年JAAS年次大会への招聘研究者を Anna Mae Duane氏 (University of Connecticut, Department of English and American Studies) Simeon Man氏 (University of California, San Diego, Department of History) と決定した。両氏は, 上記(4)のJAAS-ASA-ASAK共催ワークショップ “Transnational Contact and Human Mobility” で報告を行う。さらに, Patricia Ventura氏 (Spelman College) の来日が追加決定した。

(6) ASAからの招聘者(上記(5))によるプロセミナー

ASAとの共催によるプロセミナーを, 立教大学(ホスト:松原宏之会員)にて2023年6月5日, 立命館大学(ホスト:坂下史子会員)にて同6月9日に開催することを決定した。

(7) 日米友好基金給付金による, OAH研究者短期滞在プログラムのゲスト研究者

① 2022年度OAH短期滞在プログラムの実施

Farina King氏 (Northeastern State University) が大妻女子大学(ホスト:佐藤円会員, 期間:2022年5月27日~6月18日)に, Erik Loomis氏 (University of Rhode Island) が専修大学(ホスト:南修平会員, 期間:同5月30日~6月16日)に滞在した。

② 2023年度OAH短期滞在プログラムの決定

愛知県立大学(ホスト:久田由佳子会員, 期間:2023年6月1日~16日)にJennifer Dorsey氏 (Siena College, Department of History), 明治大学(ホスト:兼子歩会員, 鱒淵秀一会員, 期間:同6月2日~18日)にJane Kamensky氏 (Harvard University, Department of History) が滞在することが決定した。両氏は, ホスト校企画による複数回の講演のほか, 2023年・第57回JAAS年次大会ワークショップ “Liberty and Equality in Early America” (上記(4))で報告を行う。

(8) 2023年OAH年次大会での共催パネル開催, 委員派遣, 日米友好基金の大学院生補助給付

2023年OAH年次大会は, 2023年3月30日~4月2日, ロサンゼルスで開催された。JAAS-OAH共催パネルを2つ設け, 板津木綿子会員(東京大学)と新田万里江会員(武蔵大学)が報告を行なった。国際委員会からは, 佃陽子委員(成城大学)が出張し, OAHとの会議を行うとともに, 共催パネルの司会を務めた。日米友好基金による, 留学中院生のための会参加費用補助金を2名に支給した。

(9) American Studies Association of Korea (ASAK)からの, 2023年JAAS年次大会招聘研究者

2023年JAAS年次大会に, Jungkun Seo氏 (Kyung Hee University 慶熙大学校) が参加することが決定した。同

氏は、JAAS-ASA-ASAK 共催ワークショップ “Transnational Contact and Human Mobility” (上記 (4)) で報告を行う。

(10) 2023 年・第 56 回 ASAK 大会への会員派遣

第 56 回 ASAK 大会 (隔年開催) は、2023 年 10 月 20 日～21 日、Kyung Hee University / 慶熙大学校 (ソウル市) で開催予定である。JAAS 代表として、前嶋和弘会長 (上智大学) と中村理香会員 (成城大学) が参加し、講演・報告を行うことを決定した。

(11) 2024 年 OAH 年次大会での共催ワークショップ

2024 年 OAH 年次大会は、2024 年 4 月 11 日～14 日、ニューオーリンズで開催予定である。JAAS-OAH 共催ワークショップを 3 つ設けることを決定した。

(12) 2024 年度 OAH 研究者短期滞在プログラム (2024 年 6 月上旬来日) のホスト校決定

2024 年度ホスト校は、共立女子大学 (ホスト: 佐原彩子会員)、京都外国語大学 (ホスト: 佐々木豊会員) に決定した。

(13) 2024 年・第 58 回 JAAS 年次大会における ASA との共催ワークショップの決定

2024 年・第 58 回 JAAS 年次大会 (2024 年 6 月上旬、早稲田大学) で、ワークショップ “Climate Change, ‘Natural’ Disaster, and Global Unrest” を ASA と共催することを決定した。

13. 会長選挙について

2023 年 5 月 18 日を締め切りとして理事を対象に次期会長選挙を実施した。5 月 27 日に開票した結果、中嶋啓雄会員 (大阪大学) が選出された。

次期会長選挙の結果について

2023 年 5 月 18 日を締め切りとして理事による次期会長選挙の投票が行われ、投票総数は 25 票で選挙は成立し、開票の結果、中嶋啓雄会員が有効投票の過半数を獲得して、次期会長に選出されました。

2023 年 5 月 27 日 次期会長選挙管理委員会 (森丈夫、北美幸)

第 28 回清水博賞審査結果のお知らせと第 29 回公募のお知らせ

アメリカ学会では、1996 年度から故清水博会員および同夫人からの寄付金を基金として、「アメリカ学会 清水博賞」を設けています。この賞は、主として若手研究者が最初に発表した研究成果の中から、特に優れた作品を毎年数点程度選び、賞状と賞金 5 万円を贈るものです。

第 28 回清水博賞候補作として、2022 年 1 月 1 日から 12 月 31 日までの期間に出版された著書のなかから、4 点の作品の推薦が寄せられ、厳正な審査の結果、以下の作品に清水博賞が授与されました。

長史隆 (広島市立大学)

『「地球社会」時代の日米関係——「友好的競争」から「同盟」へ 1970-1980 年』(有志舎, 2022 年)

Takahito Moriyama (南山大学)

Empire of Direct Mail: How Conservative Marketing Persuaded Voters and Transformed the Grassroots (University Press of Kansas, 2022)

Yu Tokunaga (京都大学)

Transborder Los Angeles: An Unknown Transpacific History of Japanese-Mexican Relations (University of California Press, 2022)

推薦および審査にご協力いただきました会員の皆様に感謝申し上げます。

第 29 回清水博賞選考委員会は、2023 年 1 月 1 日から 12 月 31 日までに出版される作品について、会員諸氏からの積極的な推薦 (自薦・他薦) をお願いいたします。推薦作品につきましては、2024 年 1 月 8 日 (月) までに、学会ホームページの「お問合せ・応募」フォームよりお送り下さい。

清水博賞選考委員会

2022 年度決算及び 2023 年度予算

総会において 2022 年度決算及び 2023 年度予算についてご承認をいただきました。ここに収支報告および予算を掲載し、会員各位へのご報告とさせていただきます。なお、2022 年度の収支報告は、出納帳その他の関連書類とあわせて、佐藤千登勢、小塩和人各監事の監査を受け、適切と認める旨の監査報告書が提出されていることをご報告いたします。
(財務担当 板津木綿子)

アメリカ学会 2022 年度決算

科 目	2022 年度予算 (a)	2022 年度決算 (b)
1. 年会費	8,400,000	7,960,000
2. 雑収入	400,000	364,450
3. 広告収入	30,000	0
4. 寄付金	0	0
5. アメリカ研究振興会助成金	1,000,000	1,000,000
6. 日米友好基金 (OAH)	2,200,000	2,201,583
7. 日米友好基金 (ASA)	500,000	505,940
小 計 (A)	12,530,000	12,031,973

□支出の部

科 目	2022 年度予算 (a)	2022 年度決算 (b)
1. 会計費	3,630,000	3,062,226
01) 事務局人件費	650,000	650,000
02) 業務委託費	1,700,000	1,733,881
03) 常務理事会費	300,000	0
04) 会費郵送通信費	130,000	35,689
05) 事務用品費	100,000	21,501
06) 広報・電子化情報委員会費	500,000	320,335
07) 名簿作成費	0	0
08) 選挙関連費	0	0
09) 口座振替・郵便振替手数料	150,000	122,194
10) 会務雑費	100,000	178,626
2. 研究事業費	9,240,000	7,261,902
01) 年次大会費	300,000	347,706
(1) 大会費	300,000	347,706
(2) 企画委員会費	0	0
(3) 非定職者旅費補助	0	0
02) 国際交流費	3,740,000	3,460,520
(1) 国際交流活動費	340,000	110,520
(2) OAH 短期滞在	1,850,000	1,850,000
(3) ASA 年次大会派遣	700,000	700,000
(4) ASAK 年次大会招聘	0	0
(5) OAH 年次大会派遣	350,000	350,000
(6) 海外渡航奨励金	500,000	450,000
03) 年報刊行費	1,850,000	1,067,073
(1) 年報編集委員会費	200,000	63,115
(2) 年報印刷費	1,200,000	846,274
(3) 年報郵送通信費・雑費	300,000	157,684
(4) JSTAGE 公開費	150,000	0
04) 英文ジャーナル刊行費	1,950,000	1,486,867
(1) 英文編集委員会費	200,000	15,000
(2) 英文印刷費	1,000,000	702,526
(3) 英文郵送通信費・雑費	150,000	135,888
(4) コピーエディター雑費	600,000	633,453
05) 会報刊行費	700,000	658,418
(1) 会報印刷費	300,000	284,894
(2) 会報郵送通信費	400,000	373,524
(3) 会報雑費	0	0
06) 清水博賞委員会費	300,000	114,814
07) 斎藤眞賞委員会費	0	61,540
08) 中原伸之賞委員会費	150,000	64,964
09) 研究教育支援費	150,000	0
10) 研究事業予備費	100,000	0
小 計 (B)	12,870,000	10,324,128

当期収支差額 (A - B)	▲ 340,000	1,707,845
前期繰越金 (C)	21,382,651	21,382,651
次期繰越金 (A - B + C)	21,042,651	23,090,496

アメリカ学会 2023 年度予算

科 目	2023 年度予算
1. 年会費	8,400,000
2. 雑収入	400,000
3. 広告収入	30,000
4. 寄付金	0
5. アメリカ研究振興会助成金	1,000,000
6. 日米友好基金 (OAH)	2,600,000
7. 日米友好基金 (ASA)	650,000
小 計 (A)	13,080,000

□支出の部

科 目	2023 年度予算
1. 会計費	4,530,000
01) 事務局人件費	650,000
02) 業務委託費	1,700,000
03) 常務理事会費	300,000
04) 会費郵送通信費	130,000
05) 事務用品費	100,000
06) 広報・電子化情報委員会費	700,000
07) 選挙関連費	0
08) 口座振替・郵便振替手数料	150,000
09) 会務雑費	800,000
2. 研究事業費	9,790,000
01) 年次大会費	300,000
(1) 大会費	300,000
(2) 企画委員会費	0
(3) 非定職者旅費補助	0
02) 国際交流費	4,140,000
(1) 国際交流活動費	500,000
(2) OAH 短期滞在	1,850,000
(3) ASA 年次大会派遣	700,000
(4) ASAK 年次大会招聘	80,000
(5) ASAK 大会派遣	160,000
(6) OAH 年次大会派遣	350,000
(7) 海外渡航奨励金	500,000
03) 年報刊行費	1,850,000
(1) 年報編集委員会費	200,000
(2) 年報印刷費	1,200,000
(3) 年報郵送通信費・雑費	300,000
(4) JSTAGE 公開費	150,000
04) 英文ジャーナル刊行費	1,950,000
(1) 英文編集委員会費	200,000
(2) 英文印刷費	1,000,000
(3) 英文郵送通信費・雑費	150,000
(4) コピーエディター雑費	600,000
05) 会報刊行費	700,000
(1) 会報印刷費	300,000
(2) 会報郵送通信費	400,000
06) 清水博賞委員会費	300,000
07) 斎藤眞賞委員会費	150,000
08) 中原伸之賞委員会費	150,000
09) 研究教育支援費	150,000
10) 研究事業予備費	100,000
小 計 (B)	14,320,000

当期収支差額 (A - B)	▲ 1,240,000
前期繰越金 (C)	21,382,651
次期繰越金 (A - B + C)	20,142,651

会員のみなさまにお願い

ご住所・所属等の変更が生じた場合には、速やかに事務局 (office@jaas.gr.jp) までお知らせください。また、メールアドレスを登録されていない方は、極力ご登録くださいますようお願いいたします。

アメリカ学会中原伸之賞第4回審査結果と第5回公募のお知らせ

アメリカ学会では、故・中原伸之氏（公益財団法人アメリカ研究振興会理事長などを歴任）からの個人寄付金を基金とし、2019年度から「アメリカ学会 中原伸之賞」を設けています。この賞は、本学会員の第2作以降の単著（年齢制限なし）ないしは本学会員の最初の単著（この場合のみ出版時50歳以上であること）のなかから、日本、アメリカ、あるいは世界のアメリカ研究の水準を高めることに貢献できる、深い知見と新しい視座を提供する特に優れた研究書に、賞状と賞金5万円を贈るものです。2022年1月1日から12月31日の期間に出版された著作のなかから、自薦・他薦で寄せられた作品を厳正に審査した結果、次の作品が受賞作となりました。

推薦や査読にご協力いただきました会員・非会員の皆様に感謝申し上げます。

第4回受賞作品

Keiko Noguchi (津田塾大学), *Harriet Beecher Stowe and Antislavery Literature: Another American Renaissance* (Sairyusha, 2022)

また第5回中原伸之賞選考委員会は、2023年1月1日～12月31日に出版される作品について、会員のみなさんからの積極的な推薦（自薦・他薦）を受け付けます。推薦をいただく場合には、2024年1月9日(火)までに、400字程度の推薦理由（書式自由）を添えて学会ホームページの「お問合せ・応募」フォームよりご応募ください。自薦の場合は3冊のご献本を学会事務局に郵送でお願い申し上げます（他薦の場合にも可能ならご献本をお願い申し上げます）。学会事務局は次の通りです。〒550-0001 大阪市西区土佐堀1丁目4-8日栄ビル703A あゆみコーポレーション内アメリカ学会「中原賞選考委員会」

中原伸之賞選考委員会

第58回年次大会企画・報告募集のお知らせ

第58回年次大会は、2024年6月1日・2日に対面にて、早稲田大学早稲田キャンパスで開催を予定しています。

つきましては自由論題報告と部会企画案を、下記の通り募集いたします。会員のみなさまの応募をお待ちしております。また、分科会の継続ないし新規開催の申し込みも受け付けております。すべての応募は学会ホームページの「お問合せ・応募」フォームからPDFファイルにて、該当する件名「1）自由論題；2）部会；3）分科会」を明記し、各締切日までにお申し込みください。

1. 「自由論題報告申し込み」（締切日：2023年11月19日）

I. 申し込み

1) 報告者氏名・所属；2) 報告タイトル；3) 報告内容（和文1,500字程度、英文800語程度）；4) キーワード5つを記載のこと。報告タイトル・内容は、発表演語に準ずることとします。報告内容は未発表のものとし、すべての応募について審査を行い、結果は1月上旬までにお知らせいたします。なお、提出された企画案については、受理後の変更はできません。

II. 応募資格

自由論題での報告は、海外在住者（下を参照）を除き、会員のみとします。非会員による申し込みは、締め切り日までに入会手続きを行っている場合のみ暫定的に受理し、入会が認められ、会費納入が確認された時点で正式受理とします。

* 自由論題報告は2年連続でできますが、3年連続ではできません。

〈海外在住の非会員〉第52回年次大会より、海外在住者（国籍不問）は、非会員でも自由論題発表が一回にかぎり認められることになりました。ただし、報告にあたっては、大会参加費（8,000円）の支払いが必要となります。支払方法については、報告が認められた際に通知いたします。なお、支払われた参加費は、いかなる理由においても返金いたしません。

III. 報告にあたり

報告決定者は2024年5月14日までに、フルペーパー（和文の場合は8,000字～12,000字、英文の場合は5,000～7,500 words程度）を提出していただきます。提出されたペーパーはパスワード化し、学会ホームページにて学会員のみ閲覧・ダウンロードできるようにいたします。

2. 「部会の企画提案」（締切日：2023年9月10日）

I. 申し込み

- 1) すべての登壇予定者氏名・所属（責任者を明記）；2) 部会タイトル；3) 内容（和文 800 字程度，英文 400 語程度）。報告タイトル・内容は，発表言語に準ずることとします。企画内容は未発表のものとし，すべての応募について審査を行い，結果は 12 月下旬を目処にお知らせいたします。なお，提出された企画案については，受理後の変更はできません。

II. 応募資格

- 1) 2023 年度大会の部会・シンポジウム・ワークショップでの登壇者は，2024 年度大会での部会報告はできません。司会者，討論者としての応募も避けるようにしてください。
- 2) 登壇者の過半数は学会員であることとします。
- 3) 司会担当者は，学会員としてください。他の登壇者への連絡等をお願いするためです。
- 4) 非会員の部会登壇者への謝金，交通費等の支払いは，学会としては行いません。必要な場合には，科研費等をご使用ください。
- 5) 登壇者を選定するにあたっては，地域バランス・性別構成等にご配慮ください。
- 6) 学際性のある企画を歓迎いたします。ただし応募条件ではありません。
- 7) 大学院生や学位取得後間もない研究者の応募を歓迎いたします。

III. 報告にあたり

登壇決定者は 2024 年 3 月 31 日までに，報告要旨（和文の場合は 600 字～800 字，英文の場合は 300～400 words 程度）を提出していただきます。提出されたペーパーは，学会ホームページにて一般閲覧・ダウンロードできるようにいたします。

3. 「分科会開催の申し込み」（締切日：2023 年 8 月 31 日）

分科会については，2024 年度もオンライン開催とさせていただきます。使用するオンライン・アプリケーション（ZOOM 等）については，原則各分科会でご用意いただくをお願いいたします。どうしてもご用意いただけない場合には，年次大会企画委員会にご相談ください。

I. 申し込み

新規申し込み：1) 分科会趣旨（和文 350～400 字）；2) 責任者氏名・所属・連絡先（メールアドレス）；3) 賛同者氏名・所属（5 名）

継続申し込み：1) 継続趣旨（和文 100～200 字）；2) 責任者氏名・所属・連絡先（メールアドレス）
開催可否については，12 月下旬を目処にお知らせいたします。

II. 開催にあたり

開催が認められた分科会については，2024 年 2 月 15 日までに，企画提出依頼書（書式あり，後日送付）にて，1) 分科会の内容（報告タイトル等・日英両言語にて記載）；2) 報告者氏名・所属（日英両言語）；3) 内容紹介/報告要旨（300～400 字程度，使用言語のみ）；4) 開催予定日（ただし，年次大会プログラムと重ならないようお願いいたします）；5) 使用するオンライン・アプリケーション（ZOOM 等）とセッション ID をお知らせいただきます。
年次大会企画委員会

英文ジャーナル編集委員会からのお知らせ

〈英文書誌投稿についてのお知らせ〉

本学会員が 2022 年 1 月～12 月に出版した英語著作，英語論文（博士論文を含む）に関する情報を，『英文ジャーナル』第 35 号に掲載する予定です。英語で執筆された業績について，学会ホームページ http://www.jaas.gr.jp/journal_news_20220529.docx で示されている形式に従ってご記入のうえ，電子メール本文に貼りつけて，9 月 20 日（水）までに学会英文ジャーナル編集委員会宛（engjournal@jaas.gr.jp）にお送りください。指示された形式に従って原稿を作成していただきますよう，お願いいたします。なお，英文ジャーナル掲載の論文については，この英文書誌に収録しないこととなっておりますのでご注意ください。

〈『英文ジャーナル』投稿についてのお知らせ〉

第 36 号の特集テーマは，“New Approaches in American Studies”です。特集テーマの他，自由論題による投稿も受け付けます。投稿原稿応募申し込み（論文要旨）の締め切りは 2024 年 1 月 7 日（日），原稿締め切りは 2024 年 5 月 12 日（日）です。投稿原稿応募申し込みの記載事項と申込先の詳細について，11 月の会報（あるいはそれ以前は学会ホームページ）もご覧ください。投稿者はアメリカ学会の会員に限ります。なお『アメリカ研究』との二重投稿，あるいは日本語，英語を問わず他の雑誌に発表したものと同じ内容の投稿はご遠慮ください。

英文ジャーナル編集委員会

石井紀子・今野裕子 編著

『「法-文化圏」とアメリカ——20世紀トランスナショナル・ヒストリーの新視角』

(上智大学出版, 2022年, 3,080円)

本書は「20世紀アメリカを中心としたトランスナショナルな法文化圏の形成と変容」(科研費 石井紀子代表)による研究成果であり、ナショナルな統治の境界線が溶け合う空間、法制史においてはリーガル・ボーダーランズといわれる場の歴史的動態を探る論文集である。6章からなる本書には1章を除き、アメリカ史研究を起点とする論稿がおさめられており、トランスナショナル・ヒストリーの醍醐味に溢れている。

本書は「特に法的概念や規範に纏わる価値観を共有する越境的な文化圏」(13頁)としての「法-文化圏」を基礎的な枠組みに据えている。西洋と非西洋との出会いは、異なる価値観のせめぎ合いをもたらすものであった。本書の語る「法-文化圏」は、いずれも英米圏の思想潮流に由来する理念や規範が、非西洋的なものに遭遇し、何らかの実践や変容を迫られた場に接続されるものである。ここで取り上げられている規範には、国家主体により制定された成文法に限らず、社会秩序のあり方を模索する理念や施策が広く含まれる。例えば、人権や人道主義をめぐる「法-文化圏」において中心的な役割を担ってきたのは、国際赤十字運動やアムネスティ・インターナショナルなどのNGOであり、主権国家に限られるものではない。

本書の提唱する「法-文化圏」という概念は多面的である。ローカリゼーションを共通項とする最初の2章では、ボーダーランズに生きる人々の生活圏をかたちづくる法制度とその変遷から、「法-文化圏」という視座が描き出される。太平洋の両側に宣教師たちの足跡を追う第4章で、「法-文化圏」の主軸となるのはキリスト教普遍主義とその変容であり、ここでは法と文化の結びつきの多様性が照らし出される。続く第5章と第6章では、国際法との対話から形成される「法-文化圏」の政治的な脆さ、そして人権といった普遍的理念がその儚さゆえにアメリカの政治外交に浸透していく様が浮かび上がる。南アフリカに焦点が当てられた第3章も含め、本書を通して紡がれる「法-文化圏」のありようは、トランスナショナル・ヒストリーという学問的営為の豊さと難しさを映しだしている。我々読者が本書を通し、歴史の地図の上でどのような「法-文化圏」を見出すのかは、我々自身の関心にも委ねられるのだろう。

法文化をめぐる歴史研究は、アメリカ合衆国の歴史学界では近年最も勢いのある分野に数えられるだろう。他方で日本における法学と歴史学の乖離は、アメリカ研究においてはリーガル・ヒストリーの希薄さに結びついてしまっている。だが、近年のアメリカ社会における連邦最高裁の存在感を鑑みても、法文化という研究主題へのより多角的なアプローチが求められている。この点でも、本書は今後のアメリカ研究の方向性を示すものといえよう。

大島由香子(東京外国語大学)

三添篤郎 著

『冷戦アメリカの誕生——協働する文化と研究』

(小島遊書房, 2021年, 2,750円)

本書の原型は、筑波大学での博士論文『チェーン・リアクション—冷戦初期合衆国における学術領域の編成』であり、原爆、補聴器、サイレン、学力テスト、テレパシー、航空産業、未来予測学、そして映画と文学など、意外な諸領域が「チェーン・リアクション」を展開し、「未知との遭遇」を果たす。

一章の「核と学の遭遇—『ダック・アンド・カヴァー』、コナント、サリンジャー」では、核攻撃時に屈み頭を覆うことを説く1951年の教育映画『ダック・アンド・カヴァー』を皮切りに、教育が国防のためのマンパワー育成と共振する「核と学の遭遇」が示される。核科学者でハーヴァード学長のコナントは、学力を優先するメリトクラシーを推進した。『ライ麦畑でつかまえて』のIQの能力主義を肯定するホールデンもその流れと無縁ではないが、最終的に彼は精神病棟に収容される。『ライ麦畑でつかまえて』をマンパワー養成のための冷戦期の大学入学を永遠に先延ばしにする非大学受験小説と指摘する。

二章「戦後の補綴術—補聴器をつけた冷戦戦士たち」では、聞くことの重要性が追求される。難聴に悩む帰還兵士は不能の記号の補聴器を嫌がったが、ソ連は主人の声を受動的に聴く国民で構成され、アメリカは対話の国家であることを誇った。赤狩りの公聴会、1953年の映画『宇宙戦争』の対話に耳を傾けない難聴者としての火星星人、サイレン訓練の分析も興味深い。

三章「対抗するサウンドスケープ—『路上』における音響ネットワークの生成」は、聴覚的テキストとして『路上』を論じ、サイレンの音響防衛と対比する。潜水艦のソナー開発はレコードやラジオに應用されたが、冷戦時の音の文化とビート派の関係が追跡される。

四章「アウトター・リミッツ—超心理学者ジョセフ・バンクス・ラインのテレパシー研究」においては、兵士への洗脳の脅威が説かれるさなか、テレパシーという超心理学が共産主義の脅威に立ち向かう兵器と想定され、ビート派を経由して、コンピューター文化へと接合されてゆく歴史が浮き彫りになる。

五章「ティファニーで冷戦—『ティファニーで朝食を』における航空旅行の地政学」は、自閉的空間とされてきた『ティファニーで朝食を』を、冷戦という閉じられた世界に対抗する開かれたテキストとして、社会性を捉え直す。海外旅行は自由主義諸国が相互に交流し、共産圏の台頭を封じ込める民主主義の武器だった。旅行者ホリデーとブラジル外交官ホセとの恋も国家の外交面との絡みで解釈する。

六章「使用可能な未来—未来学の編成とポスト冷戦の構想」では、アメリカがソ連に勝利する将来を予測する未来学の台頭が検証される。50年代SF映画のようなソ連を表象するエイリアンが敵ではなく、人工知能が敵となり、ポーマン船長が人類を牽引する特使になる『二〇〇一年宇宙の旅』もまた未来学の言説の一環だった。本書では様々なテキストが「リミッツ」を超えて繋がる快感を堪能できるだろう。

西山智則(埼玉学園大学)

野口啓子 著

Harriet Beecher Stowe and Antislavery

Literature: Another American Renaissance

(彩流社, 2022年, 5,500円)

アメリカの反奴隷制文学は、南北戦争の終結と共に終了した文学ジャンルなのだろうか。むしろ、文学における民主主義を追求した「もう一つのアメリカン・ルネッサンス」と呼べるジャンルではないだろうか。本書において野口啓子氏は、南北戦争前、戦中、戦後と三つの時代を俯瞰しながら、この大きな文学史上の問いに取り組んでいる。

第一部は、1820年代後半から1830年代初頭に登場した奴隷制に反対する言説を紹介している。トマス・ジェファソンの奴隷制擁護の姿勢に反発し、アメリカの民主主義の矛盾を暴いた黒人作家ディヴィッド・ウォーカーの『アピール』や、反奴隷制小説の先駆けとなった白人作家リチャード・ヒルドレスによる『奴隷』を挙げている。

第二部では、ハリエット・ビーチャー・ストウの反奴隷制小説、すなわち『アンクル・トムの小屋』、『ドレッド』、『牧師の求婚』を取り上げ、同時代の反奴隷制文学との間テクスト性を考慮しながら、ストウによる黒人奴隷観の変遷や、彼女の文学の発展を辿っている。この三作はいずれも、女性による社会改革の力を強調している。一作目のアンクル・トムはキリスト教の殉教者であったが、二作目では、トムの受動性を批判するような攻撃的な黒人奴隷ドレッドが登場する。さらに『牧師の求婚』では、伝統的な家父長的人物からキリストの愛を信じる若い女性に力点を置き、より平等な社会を描いている。

第三部は、ストウとエイブラハム・リンカンの差異や共通点を吟味した後、ストウ文学の後継として、ウィリアム・ウェルズ・ブラウンの『クロアテル』、フレデリック・ダグラスの『我が束縛、我が自由』、ハーマン・メルヴィルの『ベニト・セレノ』、ハリエット・ウィルソンの『我らが黒んぼう』、ハリエット・ジェイコブズの『ある奴隷少女に起こった出来事』を挙げ、ストウ作品との相関性や相違を吟味しながら、反奴隷制文学の多様性や豊かさを詳らかにしている。

第四部では、リディア・チャイルドの『共和国のロマンス』とマーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』といった、戦後に問題視された人種混交やリンチを扱う作品に焦点を当て、反奴隷制文学が奴隷制の終焉と共に途絶えた文学ジャンルではなく、アメリカ文学のメインストリームとなるジャンルを形成したと議論を展開している。最後にトニ・モリソンの『ピラブド』を挙げ、反奴隷制文学の遺産が継承され、今後も発展していくことを予測し、議論を結んでいる。

本書は、反奴隷制文学の誕生以来、ストウを中心に、人種やジェンダーの異なる作家たちが、奴隷制やレイシズムへの問題意識をいかに拡大進化させていったのかを紐解いている。反奴隷制文学を大局的に俯瞰した力作であり、アメリカ文学、文化に関心のある読者から、本書が国境を超えて広く、深く読まれることを期待する。

生駒久美 (東京都立大学)

大和田俊之 著

『アメリカ音楽の新しい地図』

(筑摩書房, 2021年, 1,760円)

本書は「2016年に大方の予想を裏切り、ドナルド・トランプが第45代大統領に当選し、その衝撃を受けて構想された」もの。排外主義に支持されたトランプ政権誕生は、急激な非白人人口増加を拒絶するアメリカ国民の意志の表れなのか。非白人アーティストが益々、活躍する中でアメリカ音楽はどう変わるのか。『アメリカ音楽の新しい地図』は、この背反する現実を解き明かし、コロナ禍、人口動態、政治経済、メディアの動向にも注目、再燃したブラック・ライヴズ・マター運動との関係、100年前のスペイン風邪が起こしたパンデミックの音楽産業への影響をコロナ禍の現代と比較検証も行う。

構成は第1章から第10章まで「Webちくま」掲載の論者が主で、学会発表を展開したものも一部含まれる読み応えあるものだ。変化を余儀なくされたアーティストとしてテイラー・スウィフトとラナ・デル・レイが論じられる。カントリー音楽は従来の高齢白人男性・地方イメージから若者・女性・ヒスパニック・都会ヘファン層が移行。カントリーポップのスウィフトが、トランプ台頭でいかに新旧のバランスを取り人気を維持するのか。ミュージックビデオから記号を読む第1章は興味深い。

トランプ前大統領がコロナの元凶と名指し、アジア系へのバッシングの中、BTSがアメリカ音楽界で天下を取る。このエイジアン・インヴェイジョンと題した第9章ではブラックカルチャーから影響を受け、同様にアメリカ音楽産業を制覇したビートルズに彼らを重ねる。

第10章パンデミックとアメリカ音楽では現代と同じく、人の接触を避ける中、当時、誕生していた蓄音機や自動演奏ピアノが導入され、政府が第一次世界大戦でアメリカ兵がヨーロッパへ感染させた事実の隠ぺい策で、敵国ドイツがその元凶と情報を流布しドイツ・バッシングとドイツ色消去を起こしたという指摘は印象に残る。

その他、ブルーノ・マーズの出自とそのプレスリーという宗主国のアイコンの擬態人間としての存在をポスト植民地主義から語る第2章だが、プレスリー自身「黒人のように歌う白人」であることで更に皮肉な現象と感じる。第3章で扱われるのはヒップホップ界でのアジア系の可視化で、アフリカ系ミュージシャンによるオリエンタリズムの指摘は興味深い。第4章ではポピュラー音楽のランキングシステムがビルボード誌の歴史と共に解説される。第5章ではラナ・デル・レイが歴史の断片をサンプリングする意味とメロドラマの批評、成功の背景が検証される。第6章ではチャンス・ザ・ラッパーのアフリカ系女性、多民族都市シカゴとの関係が分析される。

第7章ではブラック・ライヴズ・マター運動とケンドリック・ラマーの関係から薬物や黒人投獄の問題、また黒人の不可視やカラーリズムではエリソンやウォーカーなど文学も援用し言及される。第8章ではカーディ・Bの政治性とアフロキューバン、ブーガルーなど音楽との関係が論じられる。限られたスペースでは評しきれぬ様々な視座からの分析に加え、本書には各章に詳しいアーティストのアルバム解説も付されていてありがたい。

君塚淳一 (茨城大学)

新入会員 (2023年7月10日現在)

三牧史奈	杏林大学	文 衆 社
鶴原麻美	京都大学 (院)	人 史 社
千田元康	流通経済大学	文 化
東郷雄太	神戸大学 (院)	政 外 日
加藤紗織	南山大学アメリカ研究センター (講)	史 政 社
川鍋健	同志社大学アメリカ研究所	法 政 史
竹田安裕子	カリフォルニア大学 (院)	史 社 ジ
加藤寿昂	京都大学 (院)	日 科 史

(* 入会申し込み順。専門領域の略記については、PDF版会員名簿作成用アンケートおよび学会ホームページに記載されている新表記法による)

訂正

『アメリカ学会会報』No. 211 の新刊紹介記事において誤字がありました。下記の通り訂正いたします。

会報 No. 211, 12 ページ
(誤) 農民画家ミラー
(正) 農民画家ミレー

なお、ホームページにアップロードしております「アメリカ学会会報」No. 211 電子版では、上記の誤りを修正しております。

年報編集委員会

編集後記

最近、アメリカ文学と終末世界について考えているせいか、マーク・フィッシャーが『資本主義リアリズム』の中で引用した、「資本主義の終わりより、世界の終わりを想像する方がたやすい」というジェイムソンとジジェクの言葉をよく思い返す。それは、もしかしたら、パンデミックという圧倒的な現実を目の当たりにした現代における想像力の意味について、思いを巡らしているからかもしれない。現実と向き合わない想像力は悪しき虚構に墮するのだろうか、この数年間、世界規模で起こっている様々な現実を直視することの難しさもまた感じるこの頃である。

(山辺省太)

2023年7月30日 発行

アメリカ学会

〒550-0001 大阪市西区土佐堀1丁目4-8

日栄ビル703A

あゆみコーポレーション内

Tel: 06-6441-5260 Fax: 06-6441-2055

<https://www.jaas.gr.jp/>

発行人 前 嶋 和 弘

編集人 渡 邊 真理子

印刷所 (株)国際文献社

〒162-0801 新宿区山吹町 358-5